鎌田　三之助　―沼地を豊かな土地に―

鎌田三之助は、文久三（一八六三）年、木間塚村（現在の大崎市鹿島台）に、大地主だった鎌田家の次男として生まれました。

そのころの村では、雨が降り続くと品井沼の水があふれて洪水となり、稲穂が水浸しになって収穫できなくなることがしばしばありました。そのため、「三年に一度しか米が取れない」といわれるほど、貧しい村になっていました。

三之助の祖父玄光と父三治は、水害に苦しむ村の人々を救うために、品井沼の排水路の改修を進めていました。そんな祖父や父の姿を見て育った三之助は、いつも品井沼の工事のことを考えていました。三之助が十四歳のとき、亡くなる間際の祖父から、

「自分の食べるものや着る服の心配をするより、まず、品井沼の心配をしなさい。」

と言われました。その言葉を聞いた三之助は、父といっしょに祖父の思いを引きつぐことを決意しました。

鹿島台小学校に建つ三之助像

十五歳になった三之助は、軍人をめざして勉強をするために東京へ行きました。しかし、病気のために軍人になることをあきらめ、政治家になることにしました。品井沼の干拓工事を進めるためには、多くの費用と人手が必要になります。そこで、政治家になれば費用や人手を集めやすくなると考えたのです。東京で五年間勉強し、村にもどった三之助は、父を助けて品井沼の干拓工事に打ちこみました。

三之助は、品井沼の干拓工事に情熱を注ぐと同時に、医療や教育にも力を入れました。そのころ、村では天然痘

干拓…沼や湿地から水をぬき、田畑などにすること。

という病気が流行しましたが、村には医者がいませんでした。さっそく、薬を購入して村人に配ったり栃木県から医師を招いて医院を開かせたりしました。また、村の青年たちに勉強を教えることにも時間を費やしました。そのため、三之助は、多くの村人から信頼されるようになりました。その後、三之助は志田郡議会議員や宮城県議会議員になりました。明治三十五（一九〇二）年には、三十九歳で国会議員になりました。三之助が東京で議員の仕事をしている間も、品井沼の干拓工事は続けられていました。

四十三歳になった三之助は、村人といっしょにメキシコに渡って移民事業に取り組み始めました。その矢先に、県令（県知事）から電報が届きました。品井沼の工事をめぐって、賛成する村人と反対する村人が対立しているので村にもどって来て、村人たちを説得してほしいという内容でした。

村にもどってみると、村は賛成派と反対派に二分され、工事も中断していました。三之助が村をはなれている間にも洪水などの被害にあい、村人たちのまとまりがなくなっていたのでした。

「メキシコでもわたしがもどってくるのを待っている人たちがいる。」

決心しかねていた三之助は、

「メキシコにはあなたの代わりをする人がいるはずです。でも、この村にはあなたが必要なのです。」

という母の言葉に後押しされました。品井沼の干拓は、祖父や父の願いでもある。何よりも自分自身がふるさとを豊かな村にすることを願っていたはずだと、改めて品井沼の干拓工事に全力を注ぐことにしました。

それからの三之助は、反対している村人の家を一軒一軒回り、説得しました。長い間、品井沼の洪水をどうすることもできずにいた村人たちは、すぐには三之助の話に耳を傾けませんでした。

「品井沼の水をぬくなんて、無理な話だ。」

「荒れ狂う自然の力を、人の手で防ごうなんてばかげている。」

天然痘…ウイルスが原因で流行し、高熱を発する。熱が引くと、顔面に発疹のあとが残る。当時は、この病気にかかって亡くなる人が多かった。

移民事業…日本人が外国に移り住んで、働くことを進める事業。

「そんな工事などできはしない。」
それでも三之助は、めげることなく、雨の日も雪の降る日も、一軒一軒訪ねて回りました。
「わたしたちは百年もの間、品井沼の洪水に苦しめられてきたのです。」
「この工事をやりとげなければ、これまでの努力がむだになるのです。」
「一時の苦しみに耐えないで、これから先も苦しみ続けることはおろかなことです。」
三之助は、言葉をつくして説得しました。どんなにののしられてもかげ口をたたかれても、決してあきらめませんでした。そんな三之助の熱意が、反対していた村人たちの気持ちを少しずつ変えていきました。一人、また一人と、三之助の説得に応じる村人が増え、ようやく工事が再開されました。三之助の心にまた灯がともりました。

工事を進めるかたわら、多くの村人の強い願いに応じて、三之助は、四十六歳で村長になりました。村長になるにあたり、村人たちに向かって、
「村は今、貧乏のどん底にある。ほかの町や村と同じようにするには、生やさしい覚悟ではいけない。明日といわず、今日からすぐに村を建て直さなければならない。たとえ一人の力は弱くとも、村民一体になって努力すればできることを信じてほしい。ぜいたくやむだづかいをやめ、一生懸命に働いてほしい。」
と呼びかけました。その翌日から、三之助は自分からお手本を示すために、ひげをそり、つぎはぎだらけの衣服を身につけ、わらじをはいて仕事をするようになりました。村長になってからの三十八年間、三之助は無報酬をつらぬき通しました。
そんな三之助や祖父の時代からの鎌田家三代の思いが村人にも通じて、品井沼の工事は以前にも増して、熱が入るようになりました。

三之助が村長になった翌年には、品井沼の干拓工事が進み、新しい排水路が完成しました。明治四十三年十二月二十六日に、その完成を祝って通水式が行われることになりました。三之助はいつものように、つぎはぎだらけの衣服にわらじ姿で、出かけようとしていました。すると、

「三之助、今日のお祝いはあなた一人のものではありません。祖父や父も連れていきなさい。」

と母から、諭すようにゆっくりと言われ、祖父と父の位牌を手渡されました。はっとした三之助は、思わず板の間に頭をすりつけて、何度も何度も母に謝りました。通水式の準備に心を奪われ、祖父や父を式典に連れて行くことを忘れていたのでした。

通水式には、県令をはじめ千人あまりの人が参加し、品井沼の排水路の完成を祝いました。通水と同時に、一瞬、会場は静まりかえりましたが、すぐに涙を流したり両手を挙げて喜んだりしている人であふれました。

通水式が終わって、三之助は船に乗り品井沼から排水路を通り、お祝い会場の松島へ向かいました。三之助は、祖父と父の位牌を背負いながら、勢いよく流れる水を、じっと見つめ続けました。

鹿島台町では、今でも三之助の偉業をたたえるために、「わらじ祭り」が行われています。

村長時代の鎌田三之助（鎌田三之助記念館蔵）

鎌田 三之助

鎌田 三之助は、文久三（一八六三）年に、木間塚村（現在の大崎市鹿島台）に生まれた。鹿島台村長として、品井沼干拓事業に力を注いだ。そまつな身なりでわらじをはいて村のすみずみを回り、郷土の発展のために一生をささげ、その姿から、「わらじ村長」として人々から尊敬と信頼を集めた。

諭す…本人がわかるまでゆっくり教えること。

位牌…先祖の戒名などが書かれた木の札。仏壇に供えてあることが多い。

偉業…世間の多くの人から認められるような仕事ぶり。